



◆津城の構成

津城は、伊勢平野のほぼ中央に位置する典型的な平城だ。北は安濃川、南は岩田川にはさまれ、これらを天然の大外堀としている。また、東に伊勢湾、西は沼や湿地で自然の要害となっていて、伊勢、伊賀に通じる交通の要衝でもあった。

本丸の東西に東の丸、西の丸を土橋で連結し、その周囲を広い内堀で囲む。二の丸はその周りを囲み、さらにその東側に総堀の堀を設ける予定だった。堀が「回」の字形に二重に



巡っている形式は、「輪郭式」、「開郭式」と言われ、名古屋城や大阪城と同じ。

◆最大規模の内堀

津城の最大の特徴は広大な内堀と言われてきたが、それを裏付ける調査結果が、昨年8月、市教育委員会から発表された。

丸之内のビルの建設予定地から津城内堀の石垣が発見されたのだ。最も残りの良い部分で、高さ2・5メートルの石垣が25メートルにわたって見つかったという。

本丸跡から北東に約85メートル離れており、内堀としては、江戸城と同規模、近世城郭においては非常に幅広いものだった。

日本の古建築（神社・寺院・城等）を専門とする、広島大学大学院の三浦正幸教授は、今年3月、藤堂高虎公入府400年記念事業「ファイナレイベント」で、「津城は内堀が大きく、日本でも有数の名城。また、日本の城の基本形で、築城技術は江戸城にも応用されている」と話している。

◆歴史① 信包が築城

津城は、織田信長の弟、織田信包（のぶかね・初め長野氏義嗣子）となり、長野信良といったにより創建され、1571年に工事を開始、1580年に完成したと考えられている。

1595年、信包に代わり、富田知信が城主となり、その子信高の時、関が原の戦いが起こった。東軍（徳川方）についた信高軍は千三百人で三万の兵に対抗したが苦戦を余儀なくされ、開城した。その後、東軍が勝利を収めたため、信高は津城主に返り咲き、復興に力を注いだ。

◆歴史② 高虎公の大改築

1608年、徳川家康の特命によって、藤堂高虎公が津城主となり、1611年、城の大改築に着手した。旧本丸の北と東の2面を拡張し、東の丸、西の丸を設け、石垣の修築など、全面的に旧態を一新した。なお、天守は、幕府への遠慮から再建されなかったとされる。

◆歴史③ 高虎公以降

その後、代々の藤堂氏は国替えもなく、比較的安定した藩政を敷いた。しかし、1662年4月の大地震で城壁が破損したと言われ、12月の大火で西の丸を残して、本丸の建物が全焼。1670年6月まで、7年半かけて再建された。

明治に入り、陸軍省の管轄となり、1889年、同省より城地一切を藤堂家に払い下げられ、外堀や一部の内堀が埋められていった。さらに第二次世界大戦の終戦後、本丸の南側の内堀も瓦礫がれきの捨て場となって姿を消し、北側の内堀も縮小されてしまう。



寛永期城下町

◆実戦本位の頑強な城

津城の最大の特徴は、前述の通り、広大な内堀だが、その他に、高い石垣、「犬走り」、「枳形虎口（ますがたごうち）」なども挙げられる。「犬走り」は石垣の崩落を防ぐために設けられた石垣と堀の間のスペースのこと。「枳形虎口」は、最初の門と次の門にはさまれた空間が枳のよう

に四角い空間になっている二重の城門で、敵の侵入をはばむもの。

（参考）

*「三重の近世城郭」三重県教育委員会編
*よみがえる日本の城16大垣城 津城「学習研究社」ほか

◆津城 本丸・西之丸復元模型

2007年11月に、県技能士会（小林清良会長）の三重県技能士会津城プロジェクトチームが、市や津商工会議所などでつくる藤堂高虎公入府400年記念事業実行委員会から制作委託を受けた。同年12月から約4ヶ月間の制作期間をかけ、見事に完成した。

プロジェクトチームは建設業、左官業、塗装業、家具職人らから成る約五十人。

完全な本丸の資料が残っていないなど、図面を書く上での苦労もあったようだが、伊賀上野城をはじめとし、遠くは愛媛県の今治城にも出かけるなど、高虎公が築城した約10ヶ所を視察



津城復元模型



して、図面を完成させたという。本丸外周部分（隅櫓（すみやくら）、多聞櫓（たもんやくら）及び東西の鉄門（くろがねもん））については、県所蔵の、本丸周辺の櫓などの実測図である「御城内御建物作事覚四（ごじょうないおんたてものさくじおぼえよん）」を基に制作した。

本丸内部の建物のうち御台所（おだいどころ）、祭所、玄関前長屋及び御書院については、伊賀市個人所蔵資料「津城本丸建物之図」に記された建物配置を参考に制作。

御広間の配置については、「作事覚四」の一部が描かれている能舞台との関係から位置を想定している。

また御台所については、火を使う場所であり、防火の観点から瓦葺塗壁造（かわらぶきぬりかべづくり）と想定している。

なお、東西の鉄門については、本来は木材部分の表面に典範を貼る構造だが、省略した。天守閣は、江戸時代前期には存在していた可能性もあるが、「作事覚四」の描写に基づき、復元はしていない。

模型は縦1・8メートル、横2・6メートル、実際のサイズの100分の1の大きさだ。

図面をもとにフリーハンドで作られた階段、金具の部分までこだわった井戸、本場に渡れてしましそうな橋など、細かいところまで職人達の技が生かされている。黒漆噴（しつくい）に和紙を貼り付けて作られた石垣には、へらで筋を付けて古さを表現しながら、実物そっくりに仕上げている。

松田直久市長は、市のHPの「市長の部屋」に、「臨場感にあふれ、当時のお城での人々の息づかいまで感じるような素晴らしいできばえ。ゆくゆくは復元につながれば……と夢はふくらむ」と記している。

◆津城丑寅三重櫓（うしとらぎ んじゅうやくら）構造模型

津城本丸北側の東隅に位置する丑寅三重櫓は、西隅に位置する戌亥（いぬい）三重櫓とともに、城内最大の櫓として津城のシンボリックな存在だった。

津城模型と同様、県技能士会が制作。同じく、県所蔵の「御城内御建物作事覚四」に記される丑寅三重櫓（「作事覚四」では東三重櫓と記す）の図を基礎資料とし、08年8月から準備を開始し、今年3月に完成、披露された。

模型は高さ1・9メートル、幅1・25メートル、実際のサイズの100分の1の大きさ。

県内産のヒノキを用いた総ヒノキの造りで、できるだけクギを使わずに柱や屋根などの骨組みを組み立てており、櫓の内部構造もよくわかる。石垣の石の形や色合いも、津城跡の石垣を



三重櫓模型



参考に、忠実に再現したそうだ。梁（はり）や庇（ひさし）の部分のカーブなど、同会会員の匠の技は見る人を引き込むと評判だ。

この精巧な2つの模型は、津市役所1階ロビーに展示されている。お近くへお越しの際は、ぜひご覧を！

内堀の石垣についてのお問い合わせは、市教育委員会・生涯学習課・電話059（229）3250まで。